

総合型選抜入学試験

二〇二五年度 藤女子大学文学部 日本語・日本文学科
総合型選抜入学試験 課題と解説

- 次のタイプ1・2のいずれかを選んで課題文を作成し、提出してください。
- 課題文には表紙を付け、選択したタイプ・氏名・課題文のタイトル・総字数をそれぞれ記載してください。課題文のタイトルは、タイプ1の場合は「変身をめぐる物語」とし、タイプ2の場合は(1)「源氏物語」と書き、(2)は取り上げる人物名を書いてから、課題の文章を書いてください。

タイプ1

【課題】

次の文章は、内田百閒「五位鶯」(一九二七年発表)と山川方夫「朝のヨット」(一九六三年発表)の全文です。これら二編の短編をよく読み、作品世界を理解した上で、変身をめぐる物語を二〇〇〇字から四〇〇〇字程度で自由に創作しなさい。二作品と関わりのある物語でも、新たに創造した物語でも可とします。

※この問題は、著作権の関係により掲載できません。

タイトル .. 五位鶯

著者 .. 内田 百閒

出版社 .. 岩波書店

ページ数 .. 『冥途・旅順入城式』 295 ~ 298

※この問題は、著作権の関係により掲載できません。

山川方夫「朝のヨット」

朝の色がほのかに東の空を染めて、間もなくその日の最初の太陽の光が、はるかな海面を錫箔のように輝かせた。洋上はまだ薄暗く、空と海の境もはつきりしなかったが、とにかく、海には朝が来ていた。

船が一羽、そのヨットの上空へゆるやかに翼を上下していた。船は、まるでどこまでも離れない決心をしたもののように、そのヨットと方向と速度を一つにして、朝空を動くかなりの風の中を翔びつづけた。

「行ってくると」

少年はスナイプ型のヨットに乗り、その紡綱を解きながら、少女に声をかけた。

「ねえ、つれて行って。私も」

「だめだったら」

少年は怒ったような声であった。

「海は、二人でたのしみに出かける場所じゃない。人間が、一人きりでぶつかりに行く相手なんだ」

「私よりも、海のほうが好きなの？」

少年はいらだち、神経質に眉をよせた。

「君とじいじよにいると、僕は、ときどきもう一人の自分が、ひどく遠いところに置き去りにされているような気分になる。僕は、そのもう一人の自分を取りもどすために海へ行くんだ。……海は、人間を本当の一人きりにしてくれる場所だからね」

「どうして一人きりになりたがるの？」

「女にはわからないさ」

少年はきびしい顔で答え、ふいに白い歯を光らせて笑いかけた。そしていった。

「君を好きだよ」

スナイプは、すでに岸を離れていた。白い帆を斜めに、群青の午後の海をすべこく行くヨットを見て、少女は目に涙がうかんできた。だが、少女は笑顔のまま手を振りつづけた。急速にひろがる二人の距離、明るいその海面の広さを、そのまま、遠ざかる帆の速さで彼女の胸を裂き、ひろがる一つの疵口のように感じながら……

少年はそして海に消えた。沿岸や離島の各所からの変電はすべて『到着ナシ』であった。急変した天候、突風と小さな竜巻とが、どうやら、その理由を語っていた。

少女は海を見ていた。しめっぽく肌に重い早朝の潮風の中を、幾艘かのヨットが、少年のスナイプを求めてはしつづけていた。

黒い海は、やがてその底の蒼緑色と、表面の波立ちとをきらかにし、舷に散る白い飛沫を舞い、ほのかに細い虹の脚が明滅した。驟雨のような細かな繁吹が少女の頬を濡らして、そのくせ澄んだ淡い色の空は、その日の上天気を約束していた。

海は、嘘のように風いてしまっていた。

「……なぜなの？なぜ、一人きりに行かなくちゃならなかったの？」

少女は、昨夜から幾百回となくくりかえした言葉をまた唇にうかべた。ふと、砂浜での少年との愛撫の記憶がよみがえって、あの夜も砂を叩きつけ怒ったような顔で逃げるように夜の海に走りこんだ少年を想っていた。何故なの？あのときもあなたは必死に「一人きり」にしがみつこうとしていた。まるで、私よりも、自分の孤独さの確證のほうを愛しているみたいだ……

でも、どうしてなの？私たち、愛しあっていたのよ。私の中にあなたはいて、あなたの中に私はいて、どうしてでもどこへ行って「一人きり」になんかなれないのに。それなのに、どうして一人きりになんてなりたがるの？……私を、きらいだったの？いいえ、そんなはずないわ。だって、あなた、君を好きだよ。……っていつてくれたじゃない。

湧きつづける涙のため、明るく平坦な初夏の朝の海は、いつまでも少女の視野でぼやけ揺れ動いた。……だが、その海こそが、いまは彼女の中の一つの巨大な疵口であり、そこに永遠の無限の沈黙を見る少女の目は、もはやただ一つの問いかけなのでしかなかった。彼女はくりかえした。

「ねえ、教えて。あなた、なぜ一人きりに行かなくちゃならなかったの？」

「私は、どこまでもその少女とヨットを追い、翔びつづけた。薄らぎかかる記憶の中で、私は少女に自分ただ、自分だけの充実を追った幼い恋人だったことを告げたかった。自分が、臆病な一箇の旅人にふさわしいこの姿でいることを告げたかった。」

だが、いくら喉をふりしぼって喘が努力しても、その叫びは、猫に似た單調な啼き声にしかならなかった。……そして、いつのまにか私は自分の飛翔の意味を忘れ、孤独のさわやかさも、愛するこの恐怖も屈辱もそのよるこびも忘れはてて、ただ少女のヨットの上、全身を洗う透明な朝の風の中で猫の啼き声をくりかえして、無心にそのゆるやかな翼の抑揚をつづけていた。

「タイパー解答例」

本ここでは「創作例」ではなく、創作を始めるにあたって課題文をどのように読みとらえるように制作を薦めさせていけばよいかについて解説します。

今回は、二作品を課題文として提示しました。それぞれの課題文の作品世界と、「変身」がどのように描かれているのかを考えて、制作の萌芽を見つけてください。

一「目」の作品は、内田百閒「五位鷹」です。非常に短い作品です。物語としての盛り上がりや、結末としての「オチ」などはない作品だと言ってよいでしょう。

この小説は、終始不穏な空気が漂う作品です。夢なのか現実なのか、よくわからないまま終わる作品です。第一段落には、寝ている頭の後ろから女の悲鳴が聞こえ、「それに応じて私の眠っている喉から不意に恐ろしい声が出た」とあります。「不意に」という言葉から、「私」の意思とは関係なく声が出たのだということがわかります。この小説の不穏さ、無気味さが、ここから読み取るようになってきます。

また、この短い小説の中に「恐(怖)ろしい」、「怖(こ)い」という言葉は七回も出てきます。他にも「いやな」、「冷汗」、「喉ががくがくと凍えた」、「外から闇が迫っている様な気がした」、「身ぶるい」がするような気持など、恐怖を感じさせる表現がたくさんあります。

第二段落での女の声と、それに答えて「私」の喉から発せられた「怖(こ)ろしい声」は夢うつつてですが、その後に「私」は眠りににつき、夢を見ます。今度は「女の物凄(こ)い叫び声」が聞こえ、「私」の喉の奥から、それに答える様な「いやな声」が洩れます。ここで、女の声は「悲鳴」から「物凄(こ)い叫び声」へと、

「私の喉から出た声は「恐(こ)ろしい声から「いやな声」へと、少し変化が見られます。」

この後「私」は、「女を殺した事があったら、怖(こ)いだろう」と考えます。急に「殺す」という物凄(こ)い言葉が出てきました。しかし、これについては、この後述へられることはありません。ただ、作品世界の恐(こ)ろしさは加速されていきます。「私」は闇へ向かい、そこで野鳥らしき存在をみとめます。ここで初めて、題名の「五位鷹」が出てくるわけです。

「私」は先ほどの声を五位鷹のものと思い、急に身ぶるいするような気持ちがあります。「私」の恐怖が読み取れる場面ですね。「私」はとまどっている鳥を追い払おうとして失敗し、鳥からじっと見つめられます。怖い場面です。「私」が杓を投げつけたことで鳥は飛び立ちますが、その際鳥は一声きやつと鳴くわけです。この「モウモウ」という声は、女の「悲鳴」や「物凄(こ)い叫び声」、「私」の「恐(こ)ろしい声」や「いやな声」と呼応しますね。そして、また「私」の喉から「モウモウ」という声が出てきます。最後は覚えのない涙が、いきなり頬を伝って「流れるのを」「私」が感じて終わります。

この小説に幾度か登場する「不意に」と、「いきなり」には、「私」の意思とは関係なく身に起きていく、ということが表されています。自分でありながら意思に反して、声が発せられ、涙が流れている。自分でありながら自分ではなくなってしまう恐(こ)ろしさ、この短い小説には漂っています。

また、五位鷹についても考えられることがあります。五位鷹は夜行性の野鳥です。啼き声に特徴があり、「夜からす」とも呼ばれています。嫌な夢を見て自覚めて外を眺めると、夜行性の野鳥がじつとこちらを見つめていて、大きな声で鳴いたとしたら……想像すると、無気味な恐(こ)ろしさを感じられませんか。

ちなみに五位鷹という名前には、「平家物語」で醍醐天皇に正五位を争えられたという逸話が隠されています。これも調べてみるのもいいかもしれません。

二「目」の作品は、山川方夫「朝のヨット」です。「五位鷹」とは異なり、この小説には無気味さや恐(こ)ろしさはあまり感じられません。短い小説ですが、話の展開があり、結末で伏線が回収されるようになっていきます。

第一段落には、鳥が空を飛んでいる描写があります。しかし、空白行を挟んだ後の段落では、一転して少年と少女のやりとりが繰り返されます。「どうして一人きりになりたがるの?」という少女の言葉に、少年は「女にはわからないさ」と答えています。ここには少年と少女のすれ違いが描かれています。少年は、絶る少女の言葉を振り切り、一人きりでヨットで海に出てしまひ、消息を絶ちます。

次の空白行の後には、少女が一人て少年に呼び掛ける場面が描かれます。少女は「なぜ、一人きりに行かなくちゃならなかったの?」と繰り返して、ぐるぐる考えを巡らせています。ここまでの場面からは、恋する少年少女のすれ違いと、一人残された少女の切なさのみが描かれているように思われます。しかし、空白行の後の段落で一気に伏線が回収されます。

最後の空白行の後で、冒頭の私は、実は少年だったことがわかります。少年は鳥になってしまっ

たのですね。囃は少女の言葉に答えることができません。いくら喉をいりしほって囃が努力して

も、その叫びは、猫に似た単調な啼き声にしかならなかった」という一文を、「五位鷹」の「声」と比べてみてください。「五位鷹」に描かれた、自分の意思とは関係なく喉から出てしまう「声」と、「朝のヨット」の、答えようとしても相手に伝わらない「声」という、二作品の「声」の違いが読み取れます。この部分を創作に繋げてみても面白いですね。

ちなみに「朝のヨット」の作者の山川方夫は、ショートショート小説をたくさん残している小説家です。最後にきちんとして「オチ」が用意されているのも特徴的です。

二作品の共通点としては、鳥、しかも飼いや慣らすことのできない野鳥が登場するという点があります。しかし、創作する際に、必ずしも鳥に扱われる必要もないでしょう。(たとえば、ペットの猫に変身する物語、などにしてしまうと、課題文の作品世界から外れてしまっ少々淋しいですが。)

そして課題文は、それぞれの作品世界が大きく異なります。ですから、両者をうまく組み合わせて創作しても、作品世界が広がるかもしれません。たとえば「五位鷹」の、無気味で不穏な世界観を踏襲しながら、「朝のヨット」のような、プロットがしっかりしたショートショートを創作するという道があると思います。もちろん、どちらか一方の世界観のみを踏襲して創作してもかまいません。

この課題では自由な創作を求めています。ただし、あくまでも課題文の作品世界を理解した上で、創作していただきたいと思えます。課題文にはたくさん創作のヒントが隠されています。それらをいかに読み取って、独自の世界を築けていくかが大切ですね。それぞれの作品世界を自らの創作を限定するものではなく、むしろ広げるものとして、上手に活かしてくれることを期待しました。

【タイプ2】

【課題】

『源氏物語』の登場人物について、紹介文を作ってください。

(1) まず、『源氏物語』がどのような作品であるのか、学校の図書館にある書籍や国語便覧などを用いて、自分なりにまとめてください。(おおよそ五〇〇字程度)

(2) 『源氏物語』にはさまざまな人物が登場します。あなたが興味を持った登場人物を二名取り上げて、その人物について説明するとともに、その人物像についての所感を記してください。その際に、その人物の発言、和歌、心情、ふるまいなどのいずれかにふれてください。(各人物につき、おおよそ一〇〇〇字程度)

【注意】

・字数は目安です。(1)と(2)を合わせて、おおよそ二〇〇〇字から四〇〇〇字前後。

・書式は自由です。

・参考とした図書を引用する場合は、必ず、自分のことばとの差異がわかるようにしてください。(引用文を「」で括弧、改行・段下げにする等)

・このレポートを書くにあたって参考とした図書などを、「参考図書一覧」「参考サイト一覧」として最後にまとめて記載してください。その際、解答例のように、書名・出版社・出版年を明記してください。webサイトを利用した場合は、URLと最終閲覧日を記してください。ただし、ウィキペディアからの引用は認めません。なお、「参考図書一覧」「参考サイト一覧」は字数には含まれません。

【タイプ2 解答例】

(1)

『源氏物語』は、十一世紀の初め頃に、当時の中宮に仕えていた紫式部と呼ばれる女房によって書かれた物語文学である。全五十四帖から成る超大作で、主人公光源氏の栄達とともに、多くの女性との間に繰り広げられる恋愛や人びとの苦悩が描き出される。物語は主人公の死後にまで及び、数奇な運命に揺り動かされていく人びとの動静が主題的に深められていく。

紫式部という女性作者による深い人間観察に基づき生み出された本作は、さまざまな貴族女性の心情について、表層的画一的なとらえ方にとどまることはなく、女性が置かれている現実的な視点に立って人物が造型され描写されている。また、心理描写のみならずそれと融合した自然描写、物語構成の妙、『源氏物語』以前の和歌、物語、漢籍を踏まえつつも新たな主題を紡ぎ出していくなど、文学史上における画期的な作品として高評価を得ている。

また、『源氏物語』は、現代に至るまで多くのジャンル、文学以外にまで広く影響を及ぼしている。現代語訳も与謝野晶子、谷崎潤一郎をはじめとする多くの作家により手がけられ、海外でも多くの言語に訳されて享受されている。その享受の幅広さからも『源氏物語』の魅力が証明されている。(五〇一字)

(2)

*問題を提示した際に列示したものと同じです。解答例で取り上げられている人物は一人のみですが、実際の解答では「課題」にある通り、人物一名につき一〇〇字程度を目安に、二名を選んでまとめてください。

空蝉について

私は、光源氏が十七歳の時に出会った空蝉という女性に興味を持った。

空蝉は、父親は中納言兼衛門督という役職を得た上級貴族で、当初は天皇との結婚が計画されていた。ところが、父親が亡くなったことになって、空蝉の運命は大きく変わることとなる。後見人を失ったことにより天皇との結婚の計画は中止され、暮らし向きも不安定に陥る中、年老いた受領、身分の低い伊予の介の後妻となった。その後、継子に当たる紀伊の守の邸で折しも方違えに訪れた源氏に侵入され、男女の契りを交わす仲になってしまふ。源氏に惹かれつつも人妻である身を感じ、その後は源氏を拒み続けるのであった。詰められぬ思いの源氏はあるとき、空蝉の弟を味方につけ、密かに空蝉の寢室に忍び込むが、直前にそれを察した空蝉は、薄衣の上着と、共に休んでいた紀伊の守の妹を残したまま寢所から逃れ去る。源氏は残された空蝉の上着を持ち去り、その移り香を懐かしみ、拒まれたことによって、かえって源氏の脳裏に空蝉のことが深く記憶されることになる。「空蝉」とは、蝉の抜け殻のように薄衣の上着のみ残り源氏から逃れたことによる呼び名である。長い年月を経た後、年老いた夫は他界し、継子の紀伊の守から求婚されたのを機に出家し、最終的には源氏の邸宅の一つである二条東院にて余生を送るのであった。

私が最も印象に残っているのは、思いがけなくも源氏と契ることになった際の空蝉の心情描写である。

いとかく憂き身のほどの定まらぬ、ありしながらの身にて、かかる御心はへを見知りかは、(中略) 見なほしたまふ後瀬をも思つたまへ慰めましを。

いとかく品定めぬる身のおほえならで、過ぎにし親の御けはひとまれるをるさとながら、たまさかにも待ちつけたてまつらば、をかしもやあらまし。

これらとともに傍線を付けたように反実仮想の構文を用いて表現されている。源氏との密通が突然侵入され抵抗できなかったことはいえ、夫ある身をやましきではなく、まず現在のしがない身分について思い嘆く空蝉に初めは違和感を抱いた。老受領との結婚により上達部から「憂き身のほど(取るに足らない身分)」の受領階級への転落が「定まらつてしまった現実を今なお受け入れられぬからこそ、以前の高い身分のまままで源氏からのたまさかの愛を受けたならば、という反実仮想をつい繰り返してしまうのだと思う。空蝉の中心にくすぶり続けるわだかまり——伊予の介との結婚すらいまだ十分に受け止め切れない現実が痛々しく表現されている。もともと天皇との結婚の可能性があっただけに源氏と結ばれることも決して不釣り合いではなかったはずだ。作者の紫式部

は、空蝉を通して、世間でもはやされている夢物語に描かれているような幸運な女性などはごくわずかであり、夢物語から外れ、苦境に生きもがく多くの現実世界の女性に焦点を当てた物語を書こうとしたのだと思う。(計一一八九字)

※解答例には『源氏物語』の本文を原文で引用していますが、引用は現代語訳でも構いません。また、本文引用は必須ではありません。

〈参考図書一覧〉

- 石田穠二他校注『新潮日本古典集成 源氏物語一』(新潮社・一九七六年)
- 秋山虔他校注・訳『新編日本古典文学全集 源氏物語①』(小学館・一九九四年)
- 秋山虔他校注・訳『新編日本古典文学全集 源氏物語⑥』(小学館・一九九八年)の巻末付録の「源氏物語主要人物解説」
- 中野幸一編『常用源氏物語要覧』(武蔵野書院・一九九五年)

〈参考サイト一覧〉

- 「源氏物語ミュージアム」<https://www.city.uji-kyoto.jp/site/genji/>
最終閲覧日二〇二四年八月五日
- 「石山寺」<https://www.ishiyamadera.or.jp/>
最終閲覧日二〇二四年八月五日

〈試験を終えて気が付いた点〉

『源氏物語』は大作ですので、全文を読み通すことは大変なことだと思いますが、せめて取り上げる人物に関連する重要な箇所などは気を付けて読んでいたかと思いますが、便利で馴染みやすい多くの参考サイトがあります。あくまでも参考までにとどめておくのが無難でしょう。時間はかかりますが、丁寧な注や現代語訳が施されている原文付きの、参考図書に示したような注釈書または忠実な現代語訳などによって、実際に作品を読み親しんでほしいと思います。現代とは風俗や習慣なども大きく異なる点があり、理解に苦しむ場面も多いかと思われませんが、千年の時を経ても変わらない点もかなり見出されるのではないのでしょうか。

解答では、人物紹介が多くなり所感がわずかしか記述されていないようなもの、人物の一部のみの説明にとどまっているものなどがありました。バランスよく記述することが望まれます。また、誤った理解に基づく記述も散見されましたので、下調べはなるべく入念に行うことを心がけてください。なお、誤字脱字等を避けるためにも提出前にはしっかりと見直すことが肝要です。